模擬裁判風ディベートゼミ

上 野 達 弘

「被告Ｙが制作したイラストは、原告Ｘの著作権を侵害するものです。そこで原告Ｘは、被告Ｙに対して著作権侵害を理由とする差止請求をいたします。理由は以下の通りです――。」

原告側の立論が朗々と読み上げられていく。懸命にメモをとる被告側。

続いて尋問の時間がやってくると、双方一歩も譲らない議論の応酬に傍聴人も固唾を飲んでいる。勝敗の行方はどうやら最終弁論に持ち越されたようだ……。

われわれの知的財産法ゼミは、このような模擬裁判風のディベートを行っている。

１．テーマ

テーマは主に著作権法関連の裁判例である。著作権法というと、映画、音楽、小説、漫画など、若い学生にとって親しみやすいものが多い。例えば、漫画のキャラクターが別のキャラクターに類似するかどうかが争点になったようなケースや、「恋愛シミュレーションゲーム『ときめきメモリアル』のストーリーを改変してプレイすることは違法

か？」という問題をめぐって最高裁までいったケースもある。そのため、ともすると浅薄な分野であるとの印象を持たれがちである。しかし、そうしたケースでも、議論していくと著作権という権利がそもそも必要なのかという根本問題に行き着く。むしろ、テーマは身近でシンプルな方がディベートに入りやすいといえよう（ポイント★きっかけの身近さ）。

2．進　行

ゼミの１年は、１チーム３名×14チームを編成することにはじまる。初回に顔合わせをしたら、翌週から３人 vs. ３人のディベートが繰り広げられる。

原告Ｘと被告Ｙが、立論（８分）、尋問（８分）、最終弁論（５分）を交互に行う（それぞれの間に１分の作戦タイムを置く）。

Timetable

Debate

① Ｘ立論	８分
② Ｙ立論	８分
③ Ｘ尋問	８分
④ Ｙ尋問	８分
⑤ Ｘ最終弁論	５分
⑥ Ｙ最終弁論	５分

Judgment

判定＆コメント

もちろん、ディベートの進行方法に関しては他にも多様なやり方が存在するが、われわれのディベートは、競技ディベートと模擬裁判の中間のようなものである。

ディベートの進行は、教員が時計を見ながらベルを鳴らすというようなやり方もあるが、われわれの場合は、スクリーンに映し出されたタイマーが時を告げ、作戦タイムにおいてはアップテンポの BGM を流すなどしている。どこかのバラエティ番組みたいで、まるで遊んでいるように見えるかも知れないが、こうしたゲーム感覚と遊び心もゼミを盛り上げる重要な要素だと私は思っている（ポイント★ゲーム感覚）。

3．ジャッジ

ディベータ以外の参加者は、全員ジャッジとして判定を行う。他人の研究報告を聞いているだけでは集中力を保てない学生でも、仲間が論争している光景にはつい見入ってしまうものである。われわれ学者も、学会などで他人の研究報告を聞いていて、どうも頭に入ってこないと感じたり、眠くなったりすることがあるが、質疑応答の時間にフロアとの論争がはじまると急に目が覚めたりするものである。一方的な発表ではなく複数人による論争は、思考を活性化させるのである（ポイント★論争による活性化）。

一連のプロセスを経てディベートが終わると、ジャッジメントタイムに入る。ジャッジは、ディベータによる議論の巧拙を対象に、一人ずつ自分なりの判定を下す。この作業を強いられているからこそ、ジャッジは全員が否応なくディベートを注視することになるのである。

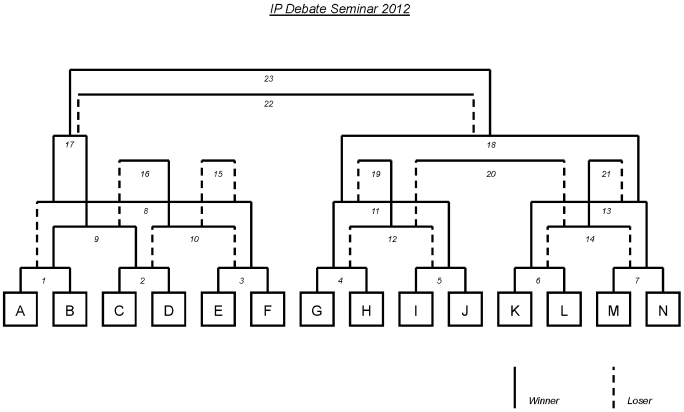
そして、全員のジャッジが終わると勝敗を発表して終了となる。すべてのジャッジペーパーは回収され、ディベータ全員にコピーが配布される。詳細なコメントが詰まったジャッジペーパーを読むのは、ディベータにとって不安なひとときでもあるが、それもモチベーションになるのである（ポイント★強制的全員参加）。

そして翌週は、前回のディベータがジャッジに回る。他方、ジャッジとして厳しいコメントを述べた人も、いずれはディベータとして評価される側に回る。したがって、当然のことながら評価する方もされる方も手を抜けない。こうして学生同士がお互いの特徴や長短所を評価し合うことによって、相乗効果的に発展するというのも一つのポイントである（ポイント★学生同士の評価）。

われわれのゼミはオープンゼミを標榜しており、誰でも聴講できる。実際のところ、毎回のようにゼミ生の友人や卒業生が参加しているほか、他大学の教授や弁護士の先生がゲストとして頻繁に登場される。これにより、ディベータやジャッジはよりいっそう聞き手を意識することになり、ゼミ全体のテンションが高まるのである（ポイント★オープンゼミ）。

4．ディベータ

こうして１年間にわたってディベートのリーグ戦を行う。勝っても負



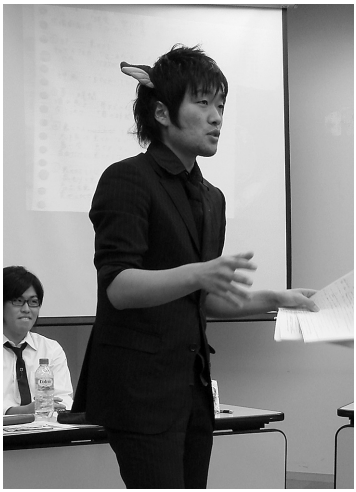
けても各チーム３回はディベートがまわってくる。そして、全勝チーム同士が決勝戦を行って優勝チームを決する。一度負けると基本的に優勝の望みは絶たれるが、負けたらモチベーションが下がるということはないようだ。これは私も意外だったが、結局、人間というのは負けず嫌いな生き物なのである。特に若者というのは、何にでも本気になれる。かつては優勝チームに賞品を用意していたが、まったく必要ないことが分かってやめた。学生同士の競争というものが、それだけで十分な内発的モチベーションになるからである（ポイント★学生同士の競争）。

負けたくないディベータは、自然と準備に力が入る。研究報告形式のゼミでは発表者グループの中で項目ごとに分業することもあるが、ディベートでは、チームがどのような戦略で攻撃防御するかについてどうしても打ち合わせが必要となる。そのため、準備段階から直前までチーム内で議論が繰り返されることになる。たとえ実際の裁判では勝訴していても、判決の論理のままでは危ないという場合もある。また、一見すると不利にみえるケースであっても活路は十分見いだせるものである。そのような中で、クリエイティブなロジックが開発され、一応専門家であ

る私自身を唸らせることも少なくない。“弁護士ごっこ”とでもいうべきこうしたロールプレイ的要素が、学生をその気にさせるのである（ポイント★RPG 的要素）。

もちろん、限られた時間で効果的にプレゼンするのは容易でない。ときにはうまくいかないこともある。緊張のあまり持ち時間の半分以上フリーズしたままだったということも一度や二度ではない。しかし、１年も続けていると学生には明らかな変化が現れる。若者というのは誰でも伸び代があるから、一定のプレッシャーや緊張感によって大化けすることが少なくないのである。最近では、ディベートの模様を録音しておいて、ネット上にアップしている。自分のプレゼンを客観的に聞いて愕然とすることもあるが（私自身もそうである）、それは必ず次に生きる。

5．効　果



ディベートにおいては、次のような能力や技術が、自然に磨かれていく。

第一に、柔軟な思考力と説得的な論理性である。ディベートというのは複数の考え方を対立させるものであるから、接した情報を無批判に受け入れるのではなく、“こういう観点からはこうともいえるが、ああいう観点からすればそうともいえる”というように物事をバランスよく多面的に考えられるようになる。こうしたことを通じて、どんな問題であっても、自己の意見をただ熱く主張するのではなく、相手の立場に立った理解ができるようになるとともに、自分自身の中で無限連鎖的に“一人ディベート”を繰り返すことによって、議論を整理する能力が磨かれていくのである。

第二に、プレゼンテーション能力である。たとえすばらしい内容であっても、それを一定の時間内で効果的に表現できなければ意味がない。ときには“自分の話を理解できない相手が悪い”と嘆きたくなる気持ちも分かるが、誰しも（われわれ学者もそうである）そのとき目の前にいる相手方を“聴衆分析”して、その知識、能力、関心、空気にアジャストできなければ十分ではないのである。

ディベートを通じて養われるこうした論理的思考力とプレゼンテーション能力は、将来どのような社会に出ても役に立つ重要なスキルだと私は信じている。実際のところ、ゼミ生の多くは知的財産法の専門家にな

らない。しかし、ゼミで磨いた能力が就職活動や企業等において役立ったという声は、あながちお世辞でもないと私は考えている（ポイント★汎用スキルとしての論理的思考力＆プレゼン能力）。

6．“教員にとって楽”

以上、やや自己満足的にわれわれのゼミのポイントを述べてきたが、もちろん、ゼミには他にもいろいろな形式がある。むしろディベートゼミという形式では必ずしも訓練できない点（例：効果的なレジュメの作成）があることは私も承知している。したがって、ディベートですべてを学べるというわけではもちろんない。

ただ、誤解を恐れず正直にいうならば、ディベートゼミは“教員にとって楽”なシステムである。もちろん、１年の最初に適切なケースブック等を用意するのは大変な作業でもあるが、そのあとは手取り足取り指導する必要がない。私は毎回、司会進行をして、ディベートとジャッジ

を聴いているだけでよい。ジャッジメントタイムにおいて議論が混乱しても、たいていは自発的に修正される。彼らは勝手に議論をし、全員がコメントすればそれで終了となる。

ゼミを見に来た人から、「まるでサークルみたいですね」といわれることがある。ゼミ生同士の仲がよく、ディベータがコスプレをするなど遊んでいるように見えるからかも知れないが、それは教員がいなくても学生が自発的に活動しているからではないかと私は思っている。極端な話、私がいなくてもゼミはできるのである（ポイント★教員にとって楽）。

7．“われわれのゼミ”

このディベートゼミは、私が立教大学に赴任した2004年に始めたものである。あれから9年が経過した。この間、私も研究者として、専門分野に関する論文を書いたり、学会で発表したりしてきたが、私にとって最大の成果物はこのゼミなのかも知れない。

ただ強調しておきたいのは、このゼミをともにつくってきたのは学生たちだということである。彼らはいつも私のノリに同調してゼミを盛り上げてくれた。私がゼミについて語るとき、いつも必ず“われわれのゼミ”と呼んでいるのはそのためである。

彼らとの末永い親交を祈りつつ、こうした環境を与えていただいた立教大学とそのスタッフに心からの感謝の思いを込めて、この小稿をしたためておきたい。